

部屋の自分が座っていたあたりを思いだす。窓越しに、夏になると、うすい紫の花をつけるムクゲの木が、確かにあったはず。

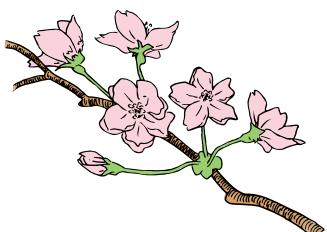
最初に転任してきて2年目、1986年から始まった長屋王邸跡やその周辺の発掘で11万点もの木簡が出土した。用意したコンテナは、またたく間に足りなくなってしまった、新米の用度係長は、係の人と一緒にその緊急手配をする「お役目」を担うこととなる。宮跡の発掘開始前には、現場ハウスと仮設トイレを先ず用意して、埋め戻しには、トラック何台分かの砂を発注する。空撮のためのヘリコプターは八尾の飛行場から飛んでくる。

前任の博物館とは、まるで違う仕事も、活気があって面白かったし、現場を終えたあの研究員の人が誘ってくれる「放課後」も、また楽しかった。

あそこ小学生だった娘は言っていた。「お父さんの研究所のこと、新聞によく出てるね」。ちょうど社会科の時間に、奈良の都のことなどを勉強していたのだろう。仕事の締め切りや日ごとの伝票処理や東京からの電話に追われていて、発掘のことや研究の中身などほとんどわからなかつたが、「お父さん」としては、ちょっと鼻が高かつたものだ。

広島、東京、大阪勤務と、奈良博を経由して戻ってきた、2度目の「奈文研」は、高松塚古墳の発掘調査と石室解体のさなかにあった。そして、平城宮跡の国営公園化や遷都1300年祭に向けて、研究所を取り巻く状況や、独立行政法人としての運営の難しさなど、課題はますます大きくなるばかりだ。

公務員として勤めはじめて（いまは、独法職員ということになるが）、40年とちょっとのうち、奈文研は6年。生来の気短かで、若い頃はよく人とも衝突した。まわりの方々のご辛抱とご理解をいただいて、ともかくなんとかやって来ることができたのだと思う。いまなら打ち明けてもいいだろう。仕事がうまくいかなくて、宮跡の中の道をとほとほ歩いていたこともあるのです。そうして今、2度にわたって奈良文化財研究所の一員として送ることができた幸せを噛みしめている。（管理部長 西村 博美）



## 光は西へ—奈文研へ

奈良にやってきたのは1973年4月。同期に入所した新人は6名、年齢には幅があった。文化庁の出向から戻った金子裕之氏も含めた7名は、研修だけでなく、研究会をはじめいろいろな場面で、行動をともにしていた。

奈文研ではなんといっても発掘調査の思い出が中心となる。発掘は平城、藤原両地区とも経験した。入所するとまず、平城宮の研修現場に入る。しばらくは、いっしょに仕事をする発掘作業員の奈良弁を理解するのに必死だった。入所2年目になると大きな現場の発掘担当者をまかされる。自分は薬師寺西僧房の調査だった。古代の僧侶の生活が、火災により焼け落ちて、そのまま埋まっていた稀有な現場である。その頃の薬師寺は金堂の再建工事の真っ最中。本坊では昼に、我々現場班のためにきしめんを準備して頂いており、朝一番に奈文研側の人数を遅滞なく連絡するのも担当者の重要な役目だった。発掘現場は、多数経験した。担当者になったのは、平城宮、藤原宮以外では、大官大寺回廊、本薬師寺西塔などである。そうした遺跡の理解のためにも、日本だけでなく、広く東アジアに目を広げる必要を痛感し、勉強の範囲をひろげるきっかけとなった。

入所してまもなく、ある研究室に顔を出したら、無口な田中哲雄氏からいきなり「何センチ？」と聞かれた。サッカーシューズの寸法である。否応なく昼はグラウンドの生活が始まる事になる。藤原へ移ってからはポジションはもっぱらキーパー、取つて当たり前、取りこぼしたらぼろくそに野次が飛ぶ、という世界だ。仕事を終え、夕方になると一室に集まり、サッカー談義に興じるという毎日だった。

発掘以外では飛鳥資料館でいろいろな特別展に関わることができて、新しく目を開かされたことが多かった。両調査部での遺物整理、報告書作成に関わる思い出も尽きない。どの部署でも個性の強い先輩方がいた。また考古学だけでなく、建築史、文献史をはじめ、学際的な雰囲気のなかで多くを学んだ。有難いことと思っている。

東北の田舎から東京の大学へ、そして就職は奈良へ。時あたかも新幹線が西へ西へ延伸していたころで、そのキャッチフレーズ「光は西へ」は自分の奈文研での思い出に重なる。

（企画調整部 千田 剛道）